心肺蘇生法に神様は必要か？

　俺の家は、さっきの細い路地から少し離れたところにあるマンションの五階にある。

「ただいま」

　戸を開けてそう言った俺だが、返事は返ってこない。当然だ。この部屋には、俺しか住んでいないのだから。俺は中学生の頃から、ずっと一人暮らしをしている。

　親がいないわけでは無い。両親は共働きで、今は二人共海外に単身赴任をしている。父はイギリスで、母はカナダだ。一応、生活費はちゃんと送ってくれるから、お金にはあまり困っておらず、そこそこ贅沢も出来る。

　最初は寂しさを感じていたが、今はそんなことは無い。お盆や正月になれば帰ってくるし、誕生日やクリスマスにはビデオレターまで送ってくれる。二人共忙しいのは分かっているので、これ以上望むのはバチが当たるというものだ。

　毎朝きちんと掃除をしているので、部屋は一応綺麗だと言っても過言では無いレベルではある。まぁ、Ｇのつくアイツは偶に出るが。

　玄関に入ってすぐの所に、俺の部屋――一応、この部屋全部が俺の部屋だと言っても過言では無いのだが――はある。窓際に置かれた机に鞄を置いて、引き出しを開ける。

　さて、そろそろいいだろう。

　引き出しの中に入っているのは、オートマチック式のエアガンだ。百均で買ったちゃっちい奴だが、こんなんでも護身用の武器である。

　ＢＢ弾は既に込められているので、俺はスライドを引く。後ろを振り返ると同時に、自分の部屋の戸の、ドアノブの辺りを狙って引き金を引いた。

「うあわわわ！」

　そこそこの速さで弓なりに黄色いＢＢ弾が飛んでいく中、部屋に響いたのは俺の声じゃ無い。中性的な、男か女か区別の付かない、そんな声だ。

　あの路地から出た直後、誰かが俺の跡をつけてくるのを、俺ははっきりと感じた。最初はストーカーか何かかと思ったが、マンションのエレベーターでも気配を感じたので、それとは少し違うだろうと判断した俺は、取り敢えず自分の部屋までついてこさせたのだ。危害を加えてくる様子もなかったしな。

　そいつは、俺の放ったＢＢ弾を空中で辛うじて躱す。だが、そいつを見て俺は絶句した。一瞬、自分の正気を疑ったほどである。

　そいつは、一言で言えば『妖精』と言った所だろうか。いや、『小人』と言うべきか？

　目の前に、これまた声と同じく中性的な顔立ちの人間のような奴がいた。太ももまで伸びた黒髪は女性らしいが、顔つきはキリッとしていて男性のようにも見える。黒いブレザーに身を包んでいるが、ボタンが無く、前ははだけて中の白いワイシャツのような物が見えている。ネクタイもしていない。ズボンは履いているが、そのズボンも『ズボン』というよりは『短パン』に近い感じで、太ももが露わになっていた。

それよりも『人間のような奴』と言ったのは、多分人間じゃないからだ。注目すべきは、背中に生えた銀色の羽と、そいつの体のサイズだろうか。体の大きさは、ちょうど俺の手の平の二倍くらいで、銀翼をパタパタと震わせて空中をフワフワと浮遊している。

こいつの事を眺めている内に、俺の心も落ち着いてきたようだ。不思議な光景を目の前にしているが、もう冷静な判断が出来そうである。

まぁ、さっき不思議な光を見たばかりだからな。不思議な物には慣れたのだろう。自分の適応力の高さには驚くばかりだ。

「な……いきなり何をする！」

　妖精っぽい奴が、そう文句を言って頬を膨らませる。ふむ。言葉遣いにも男性か女性か分かるようなものはない、か。

「何っって……そりゃあ、部屋に怪しい奴が入ってきたんだから、俺のこの対応にも、さして不思議は無いだろう？」

　こいつの観察をもう少ししたいが、取り敢えず、俺は答える。

　だが、俺の反応に不満があったのか、こいつはさらに頬を膨らませた。

「お前は何者だ？」

　取り敢えず、こいつが一体何者なのか分からない事には、どうしようもない。聞きたいことは山ほどあるが、まずはこの問いに答えてもらわねば話にならん。

　こいつは俺の質問に、暫くジトーっとした目を向けてきたが、やがて諦めたように溜息を吐いた。

「まぁ、そうだね……そりゃそうだよね」

「ごちゃごちゃ言ってないで、さっさと答えろ」

「う……五月蝿い！　いきなり攻撃されたのは、まぁ仕方のないことだったかと反省しているんだ！　それに、別にあなたに教える義務は……」

「いいから早く言え」

　そう言うと、今度は俺が溜息を吐いた。こりゃ、埒が明かない。もっとテキパキと質問に答えてもらいたいものだ。

　俺は仕方無しに、地面を指差した。こうなったら、ちょっと可哀想だが、強引な手を使わせてもらうとしよう。

「お前、地面に降りろ」

「えっ？　あ……うん」

　怪訝そうな顔をしながらも、こいつはゆっくりと地面に降りる。

「ちょっと待ってろ」

　そう言うと、俺は部屋のベッドの下にある、トリモチ式のトラップを覗く。おぉ、いるいる。

　このマンションは、理由は分からないが、何故かＧが結構出現する。なので、このマンションの住人は、一家に複数、Ｇ避けのトラップを仕掛けているのだ。

　それは俺も例外ではなく、うちは一応、リビングと自分の部屋の二箇所にトラップを仕掛けている。俺はＧは全然平気だが、流石に放っておくのもなんかアレだからな。

　トラップに引っかかったＧを、俺は素手でひっぺがす。トリモチ式なので、Ｇは死なない。ただ動きを封じるだけだ。無理矢理引っペがしたので、足が二本程取れたが、まぁいい。

「ちょ……ちょっと……それは？」

　俺が何をするのか予想がついたのだろう。怯えたような声を、この妖精みたいな奴は出す。再び浮遊しかけたが、俺は逃げようとするこいつの体を瞬時に掴んだ。我ながら見事な反射神経だと思う。

「さて……」

「ね……ねぇ、この生き物は何？　何か気持ち悪いんだけど……」

　ほう。どうやら、Ｇのことをご存知ないらしいな。妖精のような見た目といい、もしかしてこいつは異世界からやってきた何かか？

　そう考えながらも、俺はこいつの顔にゆっくりとＧを近づける。Ｇの触覚がピクンピクンとこいつの頬に触れた。

「や……やめっ……」

「うりゃっ」

「きゃぁぁぁっ！」

　俺はこいつの体とＧを放り投げる。ぴったりとこいつの体についたこいつは、そのままこいつの体から離れない。あまりの事に、こいつも衝撃を受けたのだろう。羽の動かし方を忘れたのか、地面にコテンと落ちた。その衝撃でＧはこいつの体から離れるが、すぐにカサカサとこいつめがけて突進していく。足が二本無いのに、器用なものだ。

「く……来るな！　来るなぁぁぁっ！」

　四つん這いになりながらも、慌ててＧから逃げようとするこいつだが、さっきの出来事で腰が抜けたのか、動きが鈍い。あっという間に、Ｇに追いつかれた。飛ぶことを思いついたのか、羽で空に逃げようと試みるも、その羽をＧの前足が掴んで動きを封じている。

「やめて……やめてぇぇぇ！」

「さぁて……害虫駆除でもするか」

　そう言って俺は、押入れから布団叩きを取り出す。と言っても、本来の目的でこいつを使ったことは無い。

　こいつの役目は、こういう時だ。

　俺は、こいつにまとわりつくＧ目掛けて、布団叩きを振りかぶる。何をするのか分かったのだろう。既に涙目になっている妖精っぽいこいつの目が、絶望に染まっていくのが分かった。

「待――」

「ていっ！」

　パンっ、という音が部屋に響く。「クニュギュッ！」っという可愛らしい音と共に、確かな手応えを俺は感じた。

　布団叩きを離すと、すでにＧは死んでいる。哀れなことに、Ｇから出たであろう体液を、こいつはモロに被っていた。

「それじゃあ、話してくれるか？」

　これで充分だろうと思った俺は、既に目から生気を失って虚ろになっているこいつに、そう聞く。だが、口をパクパクするばかりで、返事は無い。

　そうか……ならこちらにも考えがある。

　俺はもう一匹、トラップからＧを引っペがした。そして、それをこの妖精さんに見せる。こいつの体が、ビクンと震えたのが分かった。

「……もう一匹いっとく？」

「は……はにゃ……はにゃすから許して……」

　今にも消え入りそうな、あまり呂律の回っていないような声が発せられた。

　初めからそう言え。